

昭和52年度 卒業論文

担当教員 榎田 啓三郎 先生

論題 「存在と進化に関する雑感」¹

第1部

文学部 哲学科 1262番

氏名 片岡 章

前書き

—— いかにして進化に興味を持つに到ったか ——

僕は、入学した時は、美学をするつもりで入ったのだった。それは、僕自身作曲をするつもりでいて、そのことについて高校の時音楽の先生やその他の人に相談したところ、これからは、音楽学校などへ行くより、普通の大学で美学か数学でもやっておいた方が良さだろうと言われたためであり、又、自分自身も美学の裏付けをもって作曲をしたいと思っていたためである。

そういうわけで、美学をしようとして哲学科に入ったのだが、これがあまり意味のないものだと無意識のうちに直感していたのかどうか知らないが、どうも美学の方は殆んど勉強しなかったようである。あえてそれらしいものを挙げるとしても、武満徹やマックス・ピカートの著書位しか思い当たらない。ただ、音楽の活動などの方には力を入れていたが。

そんな具合で、本棚には哲学書らしいものは殆んどなかった。だが友達の所には、サルトルやメルロ・ポンティやらがずらりと並んでいたりする。それで、

¹ 手書き、縦書きの原本をデジタルファイルに作成し直したもの。元の形を保持しつつ、脚注付記、レイアウト調整などを行った。

読みたいということではなしに、体裁をつくろうといったようなことから、コンラート・ローレンツの『鏡の背面』を買って来て読みだしたのだった。もっとも、この本の著者のローレンツは動物行動学の専門家であり、わかり易く書かれているとはいえ、フィード・バックとかホメオスタシスとか解発メカニズムとかいった言葉が出てきて、理解が困難ではあった。しかし、これがある種の魅力となり、後に進化に興味を持つきっかけともなったのである。

ローレンツのこの書によって、僕は、人間の思考・認識・行動を支配しているメカニズムに興味を持った。そして、我々は、自由意志によって行動しているつもりでも、実はそれは、遺伝子にプログラミングされた行動パターンに従っているに過ぎなかったりするのではないかなどとも考えるようになった（もっとも、これは、ローレンツがこの著書の中で主張していた中心的な問題とはまた別のものであろう。ただ、この書がきっかけとなって以上のようなことを考えるようになったというだけのことである）。芝居などを見て感動し涙を流すという行為にしても、ひょっとして、機械的な条件反射以外の何ものでもないのかもしれない。

ここに、更に、マルキ・ド・サドの『悪徳の栄え』を読んだことが関係してくる。これも又、サドの主張の中心とは一応別のことだろうが、僕自身としては、人間の内にあるエネルギーを一糸まとわぬ純粋な形で、即ち、全く抑圧せずに（これは、肉体のメカニズムの支配から解放されてという意味も含む）噴出させるということに興味を覚えたのである。生体のメカニズム、遺伝子上にプログラミングされた行動パターン、それから、社会的に規制された道德観念、教育によって植え付けられた条件反射的な思考、行動、これらを、皆、宇宙的な意味での^{せい}生のエネルギーを歪め、閉じ込めるものとして、少なくとも思考の上では一旦排

除してみようと思った。そして、純粋な生、或いは純粋自我とは何かということを考え始め、フロイトの自我論を読んでみたりしたような次第であった。

その頃のこと、音楽の活動の上で付合っていた一人（彼は映像の方をやっていただのだが）が、ある日、W・ジェイムズの『宗教的経験の諸相』を手にしなが、神秘学、オカルティズムについて語り、現象界を越えた世界が、我々の感情や行動など様々な面と関わっているものであり、こういった世界の探求は重要であると主張していた。その頃僕はそういったことを考えたことがなかったため、ただ彼の話をああそうかと聞いているに過ぎなかったが、実はこれが後に僕に大きく関わってきたわけである。

それから、音楽の仲間の他の一人が僕との雑談の中で何気なく（らしい）口に出した言葉があって、これが、「進化」だったのである。その時何の話をしていただのかは憶えていない。恐らく、宇宙とか神とか人生とかいったことだったろうと思うが、その中で彼は、「人間の生き方は、結局、進化しかない。」という「内容のことを言ったのである（このころ仲間では、神秘学のG・I・グルジェフなどに関心を持つ者が多かった）。その時はピンとこなかったのだが、結局、これが、先のローレンツやサドや神秘学と相俟て、その後の僕の方向を決めるキー・ワードになったのである。

その後僕は、日常の自分の生活の中で「進化」という言葉を意識して使うようになった。例えば、自分の性格が変化して、つまらぬことにこだわらなくなったりしたことに気づいた場合に、これを「進化」と呼んだ。こういったことが、何度も繰り返された。そして、やがて、自分が生きるということにおける進化といわゆる生物の進化とを関連させて考えるようになり、この2つを通して働く力として、神の意志、あるいは宇宙の生命エネルギーといったものを考えるようになったのである。

第1章 進化の原理

前書き、第1章などと、一人前の研究を発表するような書き方をした上、更にこの第1章には「進化の原理」とまで大仰なタイトルを掲げたりして、いささか後ろめたいのであるが、他にふさわしいのが思い浮かばなかったのでこのタイトルにしておいた。当然予想されるように、進化学者の如く様々なデータをもとにして機能的に原理を導き出したわけではない。ただ、今までに読んだ進化に関する数少ない書物から、進化というのは簡単にいえばこういうことなのだろうと考えるに到ったことを書き記してみようというだけのことである。

最初から結論めいたことを言ってしまうが、進化というのは、意識化していく、即ち、ある生物、又は生物群にとって未だ意識化されていなかった世界、いわば広い意味での無意識界、これを、意識界に現出せしめていく、そういったプロセス、歴史であると思う。これは、動物の進化のみならず、その先に続く人間の進化にも当てはまると思うし、更には植物についてもいえるように思う（もっとも、ベルグソンが『創造的進化』の終わりの方で述べているように植物というのは無意識的な生物であろうから、意識の次元としては動物に比べて一段低い、より無意識的な意識ということにはなろうが）。

そして、又、この意識化というのは、無秩序的な状態からより秩序化された状態への移行、即ちエントロピーを減少させていく動きということもできるし、生命体（或いは前生命体）が統計の法則に従った動きをしている状態からより非統計的な動きをする状態への移行ということもできるだろう。又、少し違った角度から見れば、これはティヤール・ド・シャルダンの考え方だが、各個体が結び付いて複合化するに伴って意識も複合化し、より高次元なものになっていく運

動であるともいえるだろう。

原子同志²が結合して分子となり、分子同志が結合して …… と続いていき、巨大分子から細胞、原生動物となり、遂には脊椎動物、ヒトに至る（もっとも、一方ではずっと根元で枝分かれして昆虫類に至っているが）進化において、物質は、同程度の複雑さのもの同志が結合し、それによって新たなる物質は、その存在の位階を一段高くしているのである。この、同程度の存在段階の物質同志が結合するという法則は、原子同志が結合し分子同志が結合するという現象によって明らかであろう。乏しい知識では何とも言えないが、原子と分子とが結合するといったことはないのではないか。原子と分子ではわからないとしても、少なくとも、細胞群の結合した生物と原子とが結合するということはないに違いない。又、少し飛躍するかもしれぬが、我々人間の世界においても、普段よく付合う者同志はその存在段階が同程度なのではないだろうか。

ティヤール・ド・シャルダンや生物学者のジュリアン・ハクスリーの考えによれば、物質には、それが原子のようなものであっても、我々がいわゆる科学的認識として見ている外面のエネルギー（いわゆる物理的エネルギー）の他に内面のエネルギー（精神エネルギーということになるだろう）があって —— ティヤールは前者を接線エネルギー（*énergie tangentielle*）と呼び、後者を動径エネルギー（*énergie radiale*）と呼ぶ。ついでながら、後者は、ヨガでいうプラーナ（*prana*）、中国の鍼灸医学でいう「氣³」とほぼ同じものと見てよいのではないかと思う ——、同一の存在段階或いは複雑性の粒子同志が外面のエネルギーによって結合され、それによって、内面のエネルギーも結合することができて、精神が一段高い複雑性へと上昇、進化するということになる。

² 原文のまま。擬人化した表現とも考えられるが、通常は「同士」。以降も同様。

³ おそらく「氣」のほうが相應しい。

この、物質に内面と外面とがあるというのは、粒子同志の結合が繰返され進化が押し進められて遂には人間に至った時に精神性というものがはっきりと姿を現わす（人間において完全に姿を現わすということであって、人間以前のものにおいても精神性は認められる）という事実から逆に遡って結論したものである。

自然界の異例というものは、把握されえない状態でいたるところに広がっている事象の特性が、感知できるようになるまでに強調されたものにほかならない。

テイヤール・ド・シャルダン

『現象としての人間』 p.50

物質の外面、内面といっても、単純に空間的に饅頭の皮とあんのように外側、内側という意味でないことは言うまでもない。

さて、このように物質が結合によって複雑性を増していくにつれて、精神＝意識が益々増大し、広がっていく。そしてそれに伴って物質の運動は、次第に統計の法則に従わなくなっていく。これは、物質 —— というより生命体であるが —— が次第に意識を伴った行動をするようになるということであり、自分の行動に対して自分自身の判断を下すようになっていくということである。最も複雑性の低い物質は、完全にといいてよいほど、統計の法則に従った運動をする。

今、意識が増大し広がっていくと言ったが、これを、よりよく世界を知っていくと言い換えられないだろうか、もしそれが可能ならば、更に、コンラート・ローレンツが書いていたように、生物は宇宙のエントロピーをむさぼりながら大きくなっていくという言い方もできるのではないだろうか。

ここで示唆的なのは、宇宙は生物とは逆に時間の流れとともにエントロピーを増大させていくということである。宇宙のエントロピー化と生物の非エントロピー化との関係についてはまだ殆んど何も言えないが、もし単純に、宇宙の方を物質的なもの、生物の方を精神的なものと分けてしまうことが許されるならば、生物をも含めた宇宙全体の歩みは、物質が精神化していく歴史といえるかもしれない。

物質の精神化ということが出てきたので、次にこの観点から、ヨガにおける進化に触れてみようと思う。先ず、幾つかの概念の説明から。

我々は通常、人間を成立させているものとして、肉体と精神とを考えているが、ヨガの長年の経験に基づく教えによれば、人間にはこの他に、肉体よりも微細な身体として、微細身（linga sharira）といわれるものがあり、その上に更に微細な身体として、原因身といわれるものがある。（この微細なるものに関してある時僕が国際宗教・超心理学会会長の本山博先生に尋ねたところ、これは人間のみならず分子、原子に至るまですべてのものが持っているものであって、プラトンの説くイデアに相当するということであった。もっとも、この微細というのが未だによくわからない。どのように微細なのだろうか。）これら3つの身体のうち、肉体が病気になり得るのは当然知られているのであるが、原因身は、完全無欠なものであって、全く病を持たない。そして微細身は、完全ではなく、病を持ち得る。微細身と原因身とは、肉体のように通常感覚によって把握されうるものではなく、超感覚的にのみ把握されうるものである。又、これらの身体にはそれぞれ心があり、従って、人間は、3つの身体と3つの心とを、一対一対応の形で持っていることになる。微細身は、我々が普通幽霊と呼んでいるところのものであ

るらしく、肉体の滅びた後も残って存続するものであり、何生⁴もの経験内容を貯えているものであって、いわば、カルマ（業、^{ごう}因縁）の塊である。僕の勝手な推測であるが、死んだ人が浮かばれないというのは、前述したように不完全である微細身（或いはその心）が何らかの傷を受けているということなのではないだろうか。

次にチャクラといわれるものについてであるが、これは、今述べた微細身という組織における中枢器官であり、従って、微細身と同様、超感覚的にしか見ることはできない。

チャクラは、主なものとして、7つあり、それぞれ、下から順に次のように呼ばれる。尚、括弧内に、その位置を記す。

- (1) ムラダーラチャクラ（会陰、尾骶骨）
- (2) スワディスターナチャクラ（下腹部、丹田）
- (3) マニブラチャクラ（胃の上中央）
- (4) アナハタチャクラ（胸骨下部上方）
- (5) ヴィシュダチャクラ（喉）
- (6) アジナチャクラ（眉間）
- (7) サハスララチャクラ（頭頂）

更にこれらに加えて、ララナ、マナス、ソマの3チャクラがある。

これらチャクラと密接に結び付いたものにナディがある。最も重要なスシュムナ、イダ、ピンガラの3ナディ（これらは脊髄に沿って走っている）をはじめとして、14の主要ナディがあり、これらの各々から更に支脈として細いナディが走り、その数は全体で72000といわれる（300000とする説もある）。

⁴ 原文のまま。現生・来生・その次の生 … という意味で書いている。「何世」とするべきかもしれない。

鍼灸医学で経絡、経穴といわれるものは、それぞれ、ナディ、チャクラに相應する。例えば、マニプラチャクラは、中脘に、アナハタチャクラは臍中に相應する。（チャクラは、又、神経叢、内臓器とも密接な関係にある —— スワディスターナチャクラと仙骨神経叢、泌尿生殖器系、マニプラチャクラと太陽神経叢、消化器系。）

そして、プラーナ。これは宇宙の生命力であり、もともとは、クンダリーニ（生命の根源力。尾骶骨の先端に眠っている。クンダリーニ・ヨガは、これを目覚めさせるものである。）と一緒にになっていたもので、宇宙創造の際に分かれたのだということである。

このプラーナが、チャクラによって受入れられ、チャクラは、一方ではこれをそのままナディを通して微細身全体に送り、又一方では物理的、生理的エネルギーに転換し、脊髄、神経系、脈管系を通して肉体の各組織に送り込む。ここで、神経系、脈管系を、ヨガでは粗大なナディと呼ぶ。

以上が、ヨガの教説（恐らく、ウパニシャッドから近代ヨガまでの教えの総合されたもの）における、チャクラ、ナディ、プラーナ、及び3つの身体とその心についての概観である。

そこで、物質的なものから精神的なものへの進化という問題についてヨガに関連する面で記しておこう。ただし、残念ながら、今のところ、断片的な事柄を記すことしかできないが。

先程、生命エネルギーであるプラーナがチャクラにおいて物理的、生理的エネルギーに転換されることを述べたが、この逆に物理的、生理的エネルギーをプラーナに転換することも可能なのであって、実はこれが、ヨガ^{ぎょう}行において行なわれることなのである。例えば、精液を背骨の中にある主要なナディ、スシュムナ

を通して引上げることによって、性的なエネルギーをより高い次元で働かしめることができる。宗教家がセックスを避ける理由も本来はここにあるのだろう。（ついでながら、エロティシズムと神、或いは神秘的なるものとの関連も、この、同一エネルギーの転換を考えれば何となくうなずけるような気がする。殊に、フロイトなどに出てくる性的エネルギーの昇華など。）

又、ヨガ行ではチャクラを下方のものから順次（必ずしもそうとは限らないが）上方のものへと目覚めさせていくが、その最後に当たる、最も高次のチャクラ、即ち頭頂のサハスラチャクラが目覚めると、自我の殻が完全に消滅し、宇宙の最高原理ブラフマンに到ることになるという。そうなれば、もはや再び肉体を持ってこの世に存在する必要はなくなる。これも又、物質的なものから精神的なものへの進化を示すものであろう。

さて、話が前後するが、ここで、この章を終わるに当たって、前の意識化（我々に関わっていながら未だ意識化されていないものの意識化）について身近な例をいくつか列挙しておきたい。

- （１）芸術における無意識層への旅。マックス＝エルンスト、サルバドール＝ダリらの絵画。或いは文学においても、２０世紀のシュール・レアリズム芸術は、こういったものだと思う。
- （２）岡本太郎の「坐ることを拒否する椅子」。團伊玖磨、岡本太郎両人のテレビでの対談の際の團氏の言葉「これは意識化することによって気づいたのだが、坐るという殆んど無意識的になされる行為の意識化。
- （３）精神分析の治療。無意識層のしこりを患者に自覚させることによって治療する。
- （４）科学。科学の扱うものは、現象として現われ得るものに限られるようだ

が、我々を取り巻き、又影響を与えるものを解明していく。

(5) ヨガ。個人的無意識、個人が再生する限り時空を越えて存続する個人的無意識、ユングのいう集合的無意識、これらを、^{ぎょう}行の進行とともに意識野に出現せしめていく。又、無意識的エクスタシーの意識化。

(6) ほんとうに生きることによって、個的なものと普遍的なものとは、自分の名前を与えるという決定的な行為において、自分の中の経験に結びつけられて普遍的なものとなる。

森有正『生きることと考えること』 p.84

これらは、発展、或いは前進が意識化と密接である例だが、発展、前進はそのまま進化と見做せるだろうから、これらを進化と意識化との関連を示すものとして挙げるができると思う。

第2章 究極

究極という言葉の意味するところは、進化が最後まで押し進められ、遂に到達することになるであろう最終的な形態である。それは言い方を換えるならば、進化の意義でもある。

その形態というのは、単なる推測に過ぎないが、恐らく、人間各人の自我の殻が完全に敗れ去って、あらゆる個性性が消滅し、宇宙全体が完全に一つとなった絶対無の状態ではないだろうか（今、人間の個性性という言い方をしたが、人間のみならず、物質をも含めたあらゆる存在者について言えるだろう。）これは、前章で述べたヨガの進化 —— 自我の殻を破る —— を延長して考えたものである。自我の殻を破るということは、とりもなおさず、一段高い存在となって、それまで他者であったものと融合することである。ちょうど、高い所に上れば、それまでいた場所と他の場所とが同一の視野の中に一つの場所として入ってくるのに似ている。そしてここで、他者との融合の必然の結果（というより副産物）として、テレパシーなどの超感覚的知覚能力が生ずる。

又、物質についても、これが非物質化されることは可能であって、例えばいわゆる心霊手術において、切開せずに体内の患部を取出す場合には、その患部を一旦非物質化して行なうらしい。

（ここで、宇宙の存在者に対し、人間、物質などと区別した規定をするべきではないのだろうが。）

以上はヨガの面から見た究極であったが、ティヤール・ド・シャルダンの考え方の面から今度は見てみたい。

既に述べたように、ティヤールにおいては、物質の外面のエネルギー、即ち接線エネルギーによって同一複雑性の粒子同志が結び付けられる、そういった配

列作用によって、内面の動径エネルギーが融合、増大するのであった。これは、ヨガにおける他存在との合一に当たるだろう。そしてこの作用が長い期間を経て繰返され、遂に人間に到る時、増大した動径エネルギーは接線エネルギーにとって替わって主役の座を占める。この時点は一つの臨界点であり、接近しつつある2本の直線が遂に交わり合った瞬間、それらの位置が入れ替わってしまうようなものである。この臨界点は急激な形態変化をもたらし、ヒトをそれ以前のものとは区別する思考力（réflexion に対し美田稔氏が当てた訳語であるが、思考力といってしまうと、人間の精神作用の一面に限られてしまうように思われる。感性の面も含んだく自己の内を見ること>でなければならないのではないか）が突如として出現する。動径エネルギーが接線エネルギーにとって替わって先行するということは、恐らく、人間においては生物学的な意味での進化が停止することを意味するのであろう。実際、数冊の進化に関する本を調べたところ、人間の生物学的な進化は停止するといずれも述べている。

人間は精神の次元で結合、融合していく（もっとも、ティヤールは、人間においても配列作用の先行性を認めている。人間が集合していることが必要であって、地球が球体の形を成して閉じていることが大きな意味を持っているのである。ただ、彼の場合、自身も述べているように、現象の範囲に限って人間について述べているのではあるが）。そして、僕の読み違いでなければ、この融合の渦が宇宙全体に広がり、あらゆる存在者を一つにしていく。ティヤールはこの精神化、意識化、複合化の極点を＜オメガ点＞と名付けた。

ヨガの教説もティヤールの思想も要するに同じものと思われるが、この究極においては、各存在者は、それらを成立たしめている根源的な次元で融合することになり、これは、善悪も道德も超えた地平である。そうあるが故にそうあると

しか言いようのないものだろう。道徳などは絶対的なものではない。人を殺してはいけないなどといくら声を大にして叫んだところで、それを全く気にもとめない者の手にかかれば、殺人は公然と行なわれ得るのである。もし警察力をもってそれを阻止することができるとしても、これは、道徳とか正義とかの問題ではなく、純粹に物理的な力関係の問題である。殺人者の腕力がとてつもなく大きなものであれば、やはり殺人はできてしまうのだ。物体は下方に落ちてゆく。力の強い者が勝つ。

我々は、有的なもの、つまり個性を持ったものの存在の次元で議論するから誤る。善なるものをも悪なるものをも同様に成立たしめている、より根源的な、双方を共に包含するような場所的存在の次元を忘れてはならないだろう。善人も悪人も本来同じものを望んでいるに違いない。宗教などでよく言われる万物肯定はこういったものであろう。

究極について述べてきた。しかし、宇宙創造の際に、一つになっていたものが分離され —— 男と女、電気のプラスとマイナス、プラーナとクンダリーニ、… etc. —— 、そして再び究極において一つになる、こういったことが一体何なのか僕自身よくわからない。広大無辺の宇宙が自己を再確認するためにフィード・バックをかけているようにも思われるこの歴史は何の意味を持っているのだろうか。

第3章 人間進化における一般化と特殊化

生物の進化において、一般化（generalization）と特殊化（specialization）とことが言われる。特殊化というのは、ある特定の動物において、ある特定の部分だけが一定の方向に変化していったもので、最もよく挙げられるウマの指骨の減少の例をはじめとして、ゾウの長い鼻、翼になったコウモリの前肢などがある。それに対して一般化というのは、原始性と言い換えても良いようなもので、ネズミやネコの指が前後肢とも5本揃っている例などがあり、これは勿論、人間における一般化でもある。

以上のように、生物進化において一般化と特殊化が言われるのであるが、この章では、この2つの概念を、更に我々の日常経験する事象にまで拡大して、我々の主に意識面における進化に適用してみようと思う。

a. 一般化

ここで述べることは、直接には進化に結び付かないように思われるかもしれない。しかし、これらは、意識の拡大であり、エネルギーの湧出である。この、意識、エネルギーは進化を押し進める重要な要素である。従って、以下述べるいくつかの例も、進化と密接に結び付くものであると確信する。

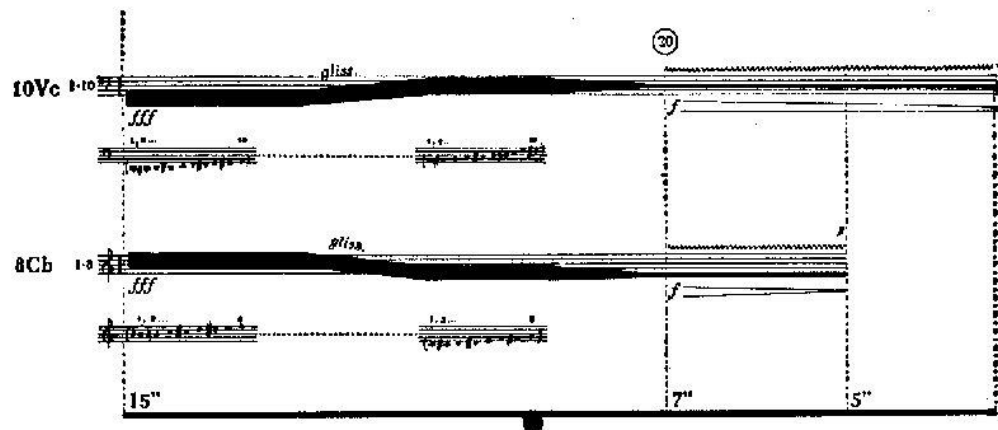
幸福感。ヘルマン・ヘッセは『幸福論』において、幸福を体験できたのは幼年時代に多いと述べているが、自分の体験からもそのように思われる。或いは、幼児期の記憶（というより気分に近い）が呼び覚まされるのに伴って経験されるとも言えるかもしれない。

そして、ヘッセもこの書の中で例として挙げているように、それは、眠りから覚めかかっている時に殊にはっきりと経験される。

春、もしくは春的な^{にほひ}匂や光が満ちているような日の午後、昼寝から目覚めか

かった状態 —— 没時間的であり、周囲の事物は薄い霧を通して見えているようである。それは又、視覚的であると同時に、聴覚的でもあり、時間軸の消滅した、透明な、静かな^(注) トーン・クラスター、雲のように、殆んど静止しているかに見えるトーン・クラスターである。対象化され得ず、輪郭のない音楽である。

(注) トーン・クラスター —— 現代音楽の作曲技法として用いられる音群で、ある範囲(音高の)内の音をすべて(といっても、12平均律であれば、1オクターヴ内には12の音しかないが)同時に響かせるもの。クラスターにも2通りあって、全体の音を均質に動かす方法と(下図)と、



(ヒロシマの犠牲者へ ベンデレッキ曲)

松平頼則『新訂 近代和声学』／音楽之友社 p.401 より

各声部が自律的な運動をしながら全体としてクラスターを形成しているものとがある。本文では、この後者の意味で用いる。それも、人声的なイメージを考えられたい。

こういった意識状態において、知り合いの女性(同じ位の年、22～23)を何人か思い浮かべた時、普段は殆んど感じないような優しさを彼女らの中に感じとっていた。彼女らは^{うしろすがた}後姿的であった。それほど静かだった。そしてこの時の優しさは、赤ん坊の頃、自分をくるんでいるものの中から見えた母親に対して、

或いはその息に対して無意識に感じていたものと同じであるに相違ない ——
メルヘン。静かで優しい性欲。コリン・ウィルソンの『賢者の石』に出てくる、
興奮のないセックス。

超作。これはヨガの用語であると思う。超という字で良かったのか、趙という
字であったのか、あるいは他の字であったのか、確信がない。これは、ある作業
をただ黙々とし続けることである。精神集中の一形態だろうと思うのだが、僕の
経験の中から拾ってみよう。喫茶店のアルバイトで皿洗いをしていた時のこと
である。昼になると、会社の休憩時間などで客が多くなる。すると、目の前に洗
い物がどんどん運ばれて来る。それらを片端から洗っていくのだが、その作業を
続けていると、エネルギーがどんどん湧いてくるのである。まだこんなに洗い物
があるなどということが全く気にならなくなり、面白くさえなってくる。交替の
時刻だから休憩するようと言われても、中断するのが惜しいような気がする。
こういったことは、単純な作業でなければできないように思う。他に例を挙げれ
ば、封筒の宛名書きとか、原稿の清書とかいったものである。

ブルックナーの音楽。殊に、半ば眠りかけた状態のときに明確に経験できる。
この状態でブルックナーの第7交響曲を聞いている（「聞く」という言葉はふさ
わしくないのだが）と、その対位法をなす線の織物を通してその彼方へと意識が
吸取られていってしまうようである。プログレッシヴ・ロックの分野の人でクラ
ウス・シュルツェという人がいるが、彼の『ブラック・ダンス』という音楽を葉
を飲みながら聞いていると再び帰らぬ者となった人々がいるということである。
音楽と人間の意識との関りには恐るべきものがあるようだ。

その他、ヨガの精神集中、瞑想、三昧における主客合一なども例として挙げら
れるだろう。

これらはいずれも、没時間的、全体的、統一的であるといえよう。

b. 特殊化

分業化。これは、全体性を失うことである。現代において、労働者が歯車の一つとしてのみ働くことの不幸は、この、全体性を失ったことによるのではないだろうか。生命は本来全体性を不可欠のものとする。それから、西洋医学が、患部の異常を元に戻すことばかりを考えていたということ。皮膚や目の病気も内臓の異常と深い関わりがあったり、更には^{ぜんしょう}前生の因縁、カルマと関係があるなど、解剖、分析と同時に全体性をも忘れてはならない。どんなに小さな粒子であっても、わずかとはいえ宇宙の彼方にまでその影響力は及んでいるのである。グルジェフが、吾々は自分の病気を自分で治せないということを言っていたと聞いたが、これは、我々が調和を失っていることへの警鐘として留意しておくべきだろう。病というのは、不調和、矛盾の現象化である。ヨガ行者は、行によって宇宙全体と調和していくにつれて病から解放されていく。

思考回路の固定化。老人の頑固さ。これも又、自己の意識を特定の一部に自ら限定してしまう不幸である。人間が常に素直であること、知らざるを知らざるとなすこと、これらはやはり進化にとって重要なことである。

特殊化と一般化、これらは常に進化につきまってきた。特殊化は、生物を、再び戻ることの許されない袋小路へと追い込んでいった。枝分かれした彼らは、その枝の先端で消滅している。そして、一般しているもの、全体性、原始性を保ち続けているもののみが、真に創造的な進化を押し進め、遂には人間に到る系統を築いていったのである。しかし吾々は決してゴールにいたるのではなく、依然として進化の段階にある。従って、素直になれず頑固なままの人間は進化の運動からとり残されてしまうだろう。

一般化、全体性は、袋小路に入り込む定向進化を防ぐものであり、又、存在者

を究極に向かわしめる根源的なエネルギーを湧出させるものでもある —— これが、「神に導かれる」ということであろう。

第4章 付加 —— 人は皆、進化の方向を知っている

ここでは、誰もが進化の方向を知っているということを示す事柄を記そうと思う。以前、ふと思いついたのを記録しておいたものである。付加としたのは、第3章までと浅からぬ関係にありそうに思えるもののどう結び付ければ良いのかわかりかねるので一応それらとは切離したためである。

2つの事柄を記しておく。

(1) 「上下」という観念

人は誰でも、「上下」という観念を持っていると思われる。即ち、「上」なるものを望ましいものとし、「下」なるものを望ましくないものとするを知っていると思われる。例えば、成績が上がる、或いは下がるなどの表現はいたるところに見られるし、高い位置に坐っている人物は、望ましい人物、即ち、レベルの高いとされる、或いは尊敬に価するとされる人物である —— 玉座がそうであるし、又、牢獄においては、「すぐれた犯罪者」は、フトン^{じょうほう}を何枚も重ねた上にあぐらをかいていたりする。上方には天国があり、下方には地獄がある。上半身（特に頭）は浄で下半身は不浄である（本当かどうかは知らないが）。戸を閉めるのは手でするものであって、足でするものではない、とされている。

そして、進化とは、とりもなおさず、望ましい方向に変化することであるから、「上下」の観念を持つすべての人間は、意識的にせよ無意識的にせよ、進化の方向を知っていると言えるに違いない。

尚、この観念は、意識されない形で人間以外のものにも（物質にさえも）あると思われる。

(2) 「光」「熱」は生命エネルギーの表現である

考えがひらめいた時に「光が見えた」といい、又、「私の心は燃えている」「あの人は暖かい人だ」という表現がされるが、これらの「光」「熱」は、物理現象からの比喻ではなく、生命エネルギーを人が本来知っていることの証しではないだろうか。

あと書き

今、書き終えて嬉しい（といっても「あと書き」が残っているので、これを終えたら嬉しいだろうというべきか）。当り前だと言われそうだが、ただ重荷を降ろしたというだけではなく、これからは、本を読むにしても、風景を見るにしても、卒論にとらわれずに素直にそれができそうだということである。何の目的意識もなく。目的意識がないというのは敗北的で情ないことに思われがちだが、第3章で述べた一般化、全体性は、目的意識の消滅した状態である。目的意識は、変に持てば、自我の殻となる。僕は、子供の様な目でものを見ることがをしたい。子供の素晴しさはその全体性にあるのだろう。変に利口な子供は駄目だ。ピカソはジャガイモに顔を書いて喜んでいたし、熊谷守一はいつまでもじっとアリを眺めていた。

尚、この論文は、10月に書いたものであり、提出する頃までこの考えが持続するかどうかは保証の限りではない。場合によっては、180度転回しているかもしれない。

唯円「あめつちがくずれても二人の恋はかわるまいと、私たちは、いくたび、
かたく誓ったことでしょう。」

親鸞「幾千代かけてかわるまいとな。あすをも知らぬ身をもって！（熱誠込めて）人間は誓うことはできないのだよ。」

倉田百三『出家とその弟子』 p.198

主な参考文献

- ベルグソン（真方敬道 訳）
『創造的進化』上・下 岩波文庫
- ベルグソン（池辺義教 訳）
『意識と生命』 中央公論社 世界の名著53ベルクソン所収
- テイヤール・ド・シャルダン（美田稔 訳）
『現象としての人間』 みすず書房
- 森有正『生きることと考えること』 講談社現代新書
- 本山博『宗教経験の世界』 宗教心理学研究所
- 本山博『宗教と医学』 宗教心理学研究所
- 本山博『超能力トレーニング4週間』 東京スポーツ新聞社出版局
- K・ローレンツ（谷口茂 訳）
『鏡の背面』上・下 思索社
- J・ハクスリー（長野敬・鈴木善次 訳）
『進化とはなにか』 講談社ブルーバックス
- 阪口浩平『生物学 —— 基礎篇』 法律文化社
- マルキ・ド・サド（澁澤龍彦 訳）
『悪徳の榮え』正・続 現代思潮社
- ヘッセ（高橋健二 訳）『幸福論』 新潮文庫
- コリン・ウィルソン（中村保男 訳）
『賢者の石』 創元推理文庫
- 倉田百三『出家とその弟子』 講談社文庫